

短歌春秋

141号

目次 ● 2017年1月

秀歌を読もう

松尾祥子

特集

和倉温泉短歌大会対談

岡井隆×栗木京子

「短歌と私 岡井隆の魅力」

2

料理の歌

命をいただく

東直子

10

「料理の歌」応募作品

連載

万葉の紐を解く◇

上野 誠

24

短歌をたのしく ポイント【4】

花山多佳子

26

リレーエッセイ 震災と短歌

斉藤 梢

28

受講者作品

秀歌鑑賞

西王 燦

30

誌上添削(入門・実作)

三枝むつみ・大熊俊夫

32

ご案内

NHK学園 学習の旅のご案内 飛鳥IIクルーズ・国内の旅

44

生涯学習フェスティバル 短歌大会のご案内

47

● 選者・講師の新歌集

松尾祥子

36

● 受講者のみなさまへ

37

● あなたの声

38

● 質問箱

黒木三千代

40

● 受講者の歌集

牛山ゆう子

41

● 歌だより

香川ヒサ

42

● NHK短歌 添削指導のおしらせ

43

今月の表紙画



「初鶏」

池田 松蓮

NHK 学園
俳画講座専任講師

明けましておめでとございます。
「酉」、動物では「鶏」に当てます。元旦の
早晩に鳴く一番鶏はいさましい初鶏です。
新しい年が希望溢れる一年となりますよう
にお祈りいたします。

受講者のうた……裏表紙

「私と短歌 岡井隆の魅力」

岡井 隆 × 栗木京子

■ ナイーブな青年の歌

栗木 岡井さんと私は同じ愛知県名古屋市の出身ということ、私にとっては仰ぎ見る大先輩でいらつしやるわけです。同じ名古屋、八丁味噌のお味噌汁が美味しいなと思いがながら育ったのだなど、私は勝手に親近感を持って岡井さんの作品を拝見させていただいておられます。初めてお目にかかったのは一九八〇年代だったと思いますが、覚えていらつしやいますか？

岡井 八〇年代といいますが、僕がだいたい五十代ですね。栗木さんは本当に若かった。栗木 当時、岡井さんは愛知県豊橋市にお住まいで、私は岐阜市に住んでおりました。東海地方の歌人を中心にして「中の会」という超結社の短歌集団ができて、毎月のように研究会やシンポジウムをやっていました。女歌人ブームとかいわれ、また岡井先生が豊橋の「未来」の会員を中心にして組織しておられた「ゆにぞんの会」などもありまして、私も、そこにゲストとして参加させていただきました。そこから、ライト・ヴァースとかニューウェーブとか、そういう動きができた

した。改めて、一九八〇年代は熱い時代だったなという気がいたしております。

岡井 今と違いましたね、空気が。私も若かったし、今よりはもう少し元気が良かったかな。小島ゆかりさんも、山中智恵子さんも愛知県なんです、不思議と愛知県ではあまり騒がれなくて、どこかへ出て行って、そこでいろいろやるという感じでした。栗木さんも大学が京都だから京都から始まってということでしょう？ 僕も早くから東京に出ちゃったから、故郷という感じがあまりないというのがありますね。でも、愛知県は優秀な歌人や詩人、評論家がたくさん出ている所ですね。

栗木 今回、岡井さんの第一歌集から最新歌集までの中から、九首選びました。皆さんがよく知っていらつしやる有名な歌もあれば、あまり取り上げられてこなかったけれど、私個人にこだわりの持つ歌とかいろいろです。こうした歌についておうかがいできればと思います。

病む心はついに判らぬものだからただ置きて去る冬の花束 『斉唱』

『斉唱』は、一九五六年、昭和三十一年に刊行された第一歌集です。二十代の岡井さんの出発の歌集になるわけです。この歌、とてもナイーブな青年の気持ちがかもっています。会うことが怖い、「どこまでその人の気持ちに寄り添えるのだろうか」というところに自信が持たなくて、そつと花束だけを置いて去ったと。恋の歌のようにも読めますが、実際の「病む人」はお母様なんですね。

岡井 そうなんです。私の母親が病気をしまして、名古屋で療養していました。私は慶應義塾という大学の医学部を出て、東京で医者をやっていたんですね。「おふくろの具合が悪いから、一度戻ってきてくれ」と親父さんから言われ、行くわけです。今のように新幹線があるわけではないので大変でした。母親は病院で寝ている、あるいは家で寝ている、どちらもあり得ると思いますが、多分これは病院で寝ている時でしょう。「病む心はついに判らぬものだから」というのは、「健康な人間というものから病人の気持ちというの

はなかなかわかりにくいよ」ということも指していますし、病気をしているということ自体、若くて比較的健康的な人間から見たらわか

りにくいということもありますけれど、母親と子ども、長男という感じでのわかりにくさというのもあるんですね。あまりごたごたと聞いたら悪いということで、ただ花束を置いて帰って来た。

おっしゃるように、恋人、友人という立場の人だつてこういう歌を作ることはあり得るわけで、この歌一首だけを見せられた時に読者の側はどう思えばいいか。私は、どう思ってもらってもいいと思っています。これが、恋人や友人の話で、相手は女の人でも男の人でも、読者の読み方は自由です。僕の歌集を

読んでいる限りでは母親だということ、しかも遠く離れて住んでいて病気をしているということがわかります。「冬の花束」というのが季節も表していて、新しいところかな。

栗木 そうですね。この歌は、昔読んだ時から大好きだったんです。

ふと口をつくフレーズ

栗木 最近、小池光さんという七十歳くらいのベテラン歌人の『思川の岸辺』という歌集を読みました。小池さんの奥様が病気になるて亡くなるその経過を詠んだ作品が入って

います。その中に、「病む人のこころはわからぬものだから」誰のうた上の句ひよんと口出づ」という歌があるんですね。岡井さんの『斉唱』の歌が詞書のように引用してあるわけでもなく、その前後に「岡井隆歌集を読んで」というような言葉が入ってくるわけでもなく、放り出すようにほんとこの歌がはいっていました。私は岡井さんの歌を知っていたので、「これは岡井さんの上の句だ」とわかつたんですね。ご本人としてはどうですか？ こういう引用のしかたって。

岡井 そうですね。どうせ引用するなら正確に引用してほしいと思わざるを得ないです（笑）。小池さんとは若い頃から親しくて、五十代、六十代の頃だったかな、「岡井隆に聞きさえすれば、あるいは岡井隆を読みさえすれば、現代歌壇がこうだということがわかる」などと、最大級のほめ言葉、認め方をしてくれた若手の一人です。その後も非常に親しく付き合っていますから、正確に引用しないというのは、まさかわざと不正確に引用した、意地悪をしたんじゃないだろうなと思わなくもないですね。

栗木 小池さんは勿論、岡井さんの歌とわ



かつていて、ずらしたんだと思います。

岡井 そうかもしれない。

栗木 同じ一連の、もう少し後のほうに

「車内販売のワゴンを引いてゆるらかに岡井隆が来る夢の中」という歌が出ていますから、そこで岡井さんを匂わせているところがあります。岡井さんの歌って、フレーズが何かの拍子にはっと浮かぶことがあるんですよ。私は時々、山梨県のほうに行くのに特急あずさに乗ります。若い人だと「あずさ2号」という狩人が歌った歌を思い浮かべるかもしれないですけど、私は岡井さんの「迷うなよわが特急あずさ」とか、長崎に行けば「過ぐれ諫早」とか、思

い出しますね。「諫早」という地名に「いざ、早」をかけて「過ぐれ諫早」と。そういう、ぱっと浮かぶ名詞せりふみたいなものがあります。多分、小池さんにとっても岡井さんの歌というのは、美しい言葉の宝庫のような感じがして、「ひよんと口出づ」というあたりに、正確に一首全部が言えなくても、心のよすが

として思い出せる、言葉のきらめきを与えてくれる歌人という位置づけなのかなと思うんです。

岡井 小池さんのこの歌集は、奥様が亡くなられた後の、痛切なというより本当に気の抜けたような、生きていくのもいやだというような、そういう歌集です。わりと素直な歌集です。その中にこういう歌が挟まれているというのは、私としては嬉しい感じということでしょうかね。

格調高い言葉で歌うとき

栗木 それでは次の歌にまいりましょう。

旗は紅おほやしき小林おほやしなして移れども帰りてを
ゆかな病むもの辺に

『土地よ、痛みを負え』

一九六一年、昭和三十六年に出了第二歌集『土地よ、痛みを負え』の中の歌です。硬い感じの調べの、重厚な歌かと思えます。この歌集は、その時代を反映したと言いますか、六〇年安保闘争が背景になっています。当時、岡井さんは慶應大学を卒業して、お医者

さんとして北里大学の研究所に勤務されて、研究や診療で忙しい日々を送られていました。「病むものの辺に」というのは、自分の家族が病気をしているというのではなくて、患者さんのところに自分は帰っていかなくては、という歌ですよ。

岡井 今ご説明いただいたように、僕らが歌を作り始めた頃というのは、本職があつて、その間に短歌をやる。小説を書くのは大変だけど、医者をやりながら短歌を作る、副業的でもいいかなという感じがありましたね。これは学位論文の研究の最中でした。数年後に論文を書いて医学博士の学位をもらったんだけど、そうしたら、六〇年安保闘争が始まっちゃった。「旗は紅き」というのは赤旗ですね。今はあまり赤旗を振り回さないけれど、中心は日本共産党あるいは左翼だから、どうしても赤い旗ということになる。僕は往診の途中で、これをバスの中から見て、非常に孤独感がありましたね。学生時代に一、二年、日本共産党に非常に近い所において、実際に政治活動をやったんです。この頃は、もうすっかり研究生生活に入っていて、たまたまある日、すごい赤旗の列に出合った。さあ、こ

れをどういふふうに詠うかなということ、

いくつか詠ったのですが、自分は病人を看ながら生活している。本当は、あの中に入っている、一緒に政治活動をやったり旗をひらめかせたりして、六〇年安保闘争をやってもいいんだけど、やっぱり自分は病院に帰って病人を看るんだ、という正直な歌かな。

今、みなさん、こんな言葉は使わないでしょう、「小林」。古典語ですね。「林みたいになら」「小林」でも「林みたい」でもいい。

「帰りに」の次の「を」、これは間に挟む助詞です。これは万葉集にいくつも例が出ています。それをわざわざ使っている。「小林」とか「移れども」とか、「帰りにをゆかな」とかね。「帰りにゆかな」じゃないんです。この「を」について辞書を引くと「間に投げられる助詞」ということで強調ですよね。そこ



を強調する。「ゆかな」は「行こうかな、行きたいかな」「行こうと思うよ」ですね。「病むもの」の「辺に」の「辺に」もそうですね。古

語を古典語でわざとかためたんだね。話はすぐく現代的でしょう。赤旗を見て孤独感に浸りながら「しかし自分は引き受けている病人のところへ帰って行くんだよな」というそんな感情を、もつと生々しく現代語で言えたいのに、わざと古典語づくめで作ったんですね。古い言葉をこういうところで使うというのは。どうですか？

栗木 私は、そこがこの歌のとても大きな魅力だと思います。

岡井 自分の狙いもそうですね。

栗木 万葉のような感じも、それから漢詩のような感じもあって、一首がきちつと構成されている。そこに、決意とか覚悟が表れています。岡井さんが立派だなと思うところは、ご自分の立場というものを率直過ぎるくらい率直に表明なさることです。たとえば、東日本大震災で原発事故があった後の原発に対する考え方とかね。どうしたらいいのか立ち止まってしまおうとか、悩んでしまおうとか、迷ってしまうとか、疑問や迷いで提出すれば批判されにくかったり、叩かれにくかったりするわけです。岡井さんは、自分もどちらの立場かということ、そんなにはつ

きり言わなくてもいいのと思うくらい、はつきりとおっしゃいます。この歌も、「自分は安保闘争に共感を持っているけれど、まず仕事が大事。病む者を救うという、そちらが大事なんだ。大儀というより自分にとって大事なものを守るんだ」とおっしゃっておられます。そこはもう「危ないな」と思いますが、私も立派だと常々感服しているところです。

岡井 少数意見というのは、ほとんど無視されるわけで、わざわざそれを言う必要もないんだけれど、まあ一人くらいは言うておいたほうがいいだろうということ、言う時がありますね。古い言葉で武装しながら、自分の少数意見的なものを出しておく。原発の時もそうだし、この六〇年安保の時もそうです。自分の気持ちというのは乱れに乱れるんです。右へ行ったり左へ行ったり。そういう意味で、いろいろな歌を作ってもいいんじゃないかと思えます。ただ、間違えちゃいけないのは、自分がその時にとった行動というものだけは間違いなくあるわけだから、やはりそれは正直に出さないとイケないという感じがありましたね。今はこうして楽しく話していますけれど、その時、その場で発表した時

の切実感とか苦しさとか、特に政治性を持った作品はやりにくいですよね。

栗木 そうですね。でも、本当に潔いと思います。政治的な問題を詠う時に、文語で詠んでいる歌人があえて口語で、脱力した感じで詠む傾向がある。なるほどと思いつながら「それって逃げじゃないかな」と思うときがあります。岡井さんのような格調高い言葉づかいで自分の立場を表明する歌というのは、私はとても好きです。

手をだせばとりこになるぞさらば手を、
近江大津のはるのあはゆき

「禁忌と好色」

第十歌集、一九八二年、昭和五十七年ですから、五十代の歌ですね。この歌、私とって也喜欢なんです。「手を出せばとりこになってしまふぞ」「手を出すと危ないぞ」と言われると、「手を引つ込める」と詠う人もいると思います。それを「さらば手を」、それだったら手を出しましょうというところに岡井隆という歌人の本質があるなと思います。下の句は古典和歌の抒情ですね。「近江大津」

というのは滋賀県琵琶湖の辺り。その「はるのあはゆき」。きれいだけれど儂い。そういう情感でまとめたところ、震い付きたくなるくらい素敵な歌です。

岡井 「さらば手を、」なんて、どうして言ったんでしょう(笑)。「さらば手を、」というのは「手を出した」ということでしようかね。こういうふうだったらこうだったという、ひとつの情景を出しておいて、「近江」「大津」「はる」「あはゆき」、あるいはこつちのほうかもしれないね。あの辺りは僕の好きな場所で、近江京のあった、古典的にも非常におもしろい場所です。僕は、琵琶湖という湖が、北から南にいたるまで、おもしろいと思うんです。よくぞこの歌が栗木さんの目に留まったと(笑)。

栗木 この歌が好き、という人は多いと思います。こんなことを聞くと失礼ですけど、岡井さんはどちらかと言うと「石橋を叩いて渡る」と言うよりは「叩く前に渡る」というタイプでは？

岡井 そうそう。「石橋を叩く前に渡っちゃって酷い目に遭う」、酷い目に遭い続けてきた(笑)。

栗木 いえいえ。俊敏だから、叩く前に渡って、渡った頃に石橋が落ちるといふ感じの人間像が思い浮かびます。

岡井 ややデスパレート、絶望的だよな。あの意味では身を投げ出している。その状態をどうやって表すかという時に、こういう一首でも表せるよ、と。「誰に向かって手を出したんだい？」なんて聞かれても困っちゃうけど(笑)。

栗木 そこに含みのあるところが、この歌の広がりかなと思うんですが。

現代短歌の来し方と行方

栗木 次に不思議な歌をあげてみました。「みじかびのきやぷりきとればすぎちよびれすぎかきすらはつばふみふみ」。最近亡くなったテレビタレント、司会業で有名な大橋巨泉さんの歌です。巨泉さんは言葉の達人で、こういう短歌なのか狂歌なのか、なんだかわからないような三十一音の表現を残しているんですね。実はこの歌、一九九六年に朝日新聞社から出版された『現代百人一首』の中に入っています。岡井さんが「今選ぶならこの百首だ」として選んだのですが、その中

にあえて歌人ではない大橋巨泉の歌を選んだ。『現代百人一首』に大橋さんの作品を入れた意図をお聞きしたいです。

岡井 あの『現代百人一首』は、一般的な百人一首とは違って、現代の短歌はこういう人たちが作っているよというものを出したかったんですね。朝日新聞から依頼されて、石井辰彦さんと一緒にやりました。巨泉さんのこの歌は、万年筆のCMで出るんだよね。「みじかび」というのは「短い」。「きゃぶり」は「キャップ」。「すぎちよびれ」というのは「書いて過ぎていく」という感じ。「すぎかきすらの」は「すらすらと書ける」。「ふみふみ」の「ふみ」というのは「手紙」という意味ですから「はっぱふみふみ」と。最後に「これで手紙を書いたら書けるぜ」という見事な一首です。巨泉さんは、早稲田で寺山修司さんと俳句を競争していたらしいね。「いつも負けていた」と言っていました。これは短歌ですね。この本には、皇后陛下の御歌を入れたり、普通の人はあまり選ばないような人の歌を入れたりしたんです。巨泉さんが「よく選んでくれた」と挨拶をくれましたね。

栗木 一九八〇年代の終わり頃から、ライ

ト・ヴァースとかニューウェーブとか、短歌界でも新しい動きが出てきました。ライト・ヴァースはもともと岡井さんが提唱された考え方で、軽く日常を詠う詩のことを「ライト・ヴァース」と言って短歌に取り入れられたわけですよ。それが浸透していつて、俵万智さんとか加藤治郎さんとかがとても新鮮な歌を作って、短歌界にたちまち広まりました。岡井さんは、当時、五十代くらいになつておられましたけれど、いち早くライト・ヴァースの上質な部分を取り入れて、自分の中に生かしておられます。そういう意識があるから、大橋巨泉さんの短歌にも素早く反応されたのではないかと思うのですが。

栗木 次の歌はどうでしょう。

あのね、アーサー昔東北で摘んだら
鬼の脳なづなのやうな桑の実 『神の仕事場』

岡井 原作はちよつと違って、それをあ

る批評会で間違えてこういう形にしてくれたので、それをそのまま僕の歌にして出したんです。「アーサー」は、戦争直後のことを詠うということがあって、マッカーサーのことなんです。「アーサー」というのが名前前で「マック」がくつつくんだよね。「昔東北で摘んだら」というのは、「お宅が日本に進駐して来られて、あの頃、ほら、東北原産の物を取り寄せたりしたじゃない」ということを引つ掛けてあるんです。だけどこれは、「あのね、」なんていうところから始まっているからおかしなことになっちゃうんだね（笑）。ちよつと思ひ出したのですが、私の結社の会で「すぎちよびれすぎかきすらのはっぱふみふみ」じゃないけれど、そんな調子の歌が出てきちゃってね。そんなに上手じゃないんだけど驚いてよく見たら、まだ歌を作り始めて数年の人だった。そこで僕は、「こういう歌をあなたがお作りになるのはけっこうだけれど、短歌というものには歴史がある。万葉まで遡れとは言いませんけれど、近代短歌があつて現代短歌があつて、ここまで来た。正統派の歌がある程度勉強して作つて、その上で「はっぱふみふみ」の真似をするのはい

いですが、作り始めて一、二年で『はつぱみふみ』を始めるのはどうなんでしょうか」と言っただけです。中高年の方でしたが、ひよつとすると、短歌を作り始めた時にライト・ヴァース、大橋巨泉風のところから入っちゃって、「これでいいじゃん」という一派が出て来るかもしれませんよ。それは止めようもないでしょう。

栗木 そうですね。ひとつのギャグというとおかしいかもしれませんが、一発勝負のコピーライターが書く、広告コピーのような感じで捉えるという考え方もありますしね。

岡井 そうそう。コピーライティングというのも、相当な才能がないとできませんね。それに近いような短歌というのが出てこくはないですね。

栗木 時に、スパークするような才の煌めきを感じることもありますけれど、駄洒落とどう違うんだというところに落ちていきがちになるのが難しいですよ。

岡井 そうそう。釈道空や他の何人かの人々が、そこから先に何が出てくるだろうと、やったことがありますよ。ひよつとすると、近世、俳諧から俳句が出てきたように、正統

派の短歌ではなくて、新しい短歌形式、非常に軽くてウィットが効いていておもしろい、短歌とはまったく違う、次代短歌というようなものが、あるいは止めようもなく出て来るかもしれないね。

栗木 岡井さんは、ご自身が詩人でもいらつしやるし、詩人と交流なさっていて、詩の世界との行き来をするような、そういう軽やかさがありますね。

岡井 そうですね、詩はなんと言っても多行詩だから長いんですよ。ソネットだって十四行ある。我々は一行の詩ということですよ。

十四行と一行では非常に大きな差がありますから。四・四・三・三とか四・三・三・四、あるいは四・四・四・二でもいいんです。私もソネットという形式が好きだから作ったけど、そういうものと短歌は、やっぱり全然違いますね。どちらかという僕は、短歌のほうにまだまだ未来が描けています。詩のほうは読む人がものすごく減っちゃいまして、今日来ていらつしやる方も、現代詩などはほとんど読んでいらつしやらないと思います。あんまりピンとこないんだね。

栗木 定型は窮屈だという人もいますけれど、

ど、短歌には定型の持つ独特の場力があると思います。

岡井 そうですね。小林秀雄という有名な批評家が「一点の縛り、一点の拘束があつて自由がある」ということを言いました。定型という縛りがあるから、他のところで自由になれる。彼は、短歌・俳句を非常によくわかっていました。定型というものを意識することによって、いろいろなことがやれる。むしろ、「何をやってもいいよ」と言われると困るじゃありませんか。それと同じ感じですね。

高齡ゆえの歌い方の変化

栗木 次は、「X―述懐スル私」という、二〇一〇年、つまり平成二十二年ですから、もう八十年代に入ってから出された歌集からです。

ギリシヤでは水を盗むといふ「時」をはつかぬすみて昼寝すわれは

八十年代に入られて、たいへん若々しい岡井さんではありますが、老いの兆しのようなも

のも出てくるわけですよ。ですから、昼寝をして体力を温存する時もある。普通、ある程度の年齢の方の歌で「疲れるから昼寝をするよ」というと、なんだか情けない歌になりがちなんですけれど、そこはさすが岡井さん、ギリシヤの言葉を持ってきました。ギリシヤで「時」というのは、水を盗む、クレプシエドラという言葉で表すらしいんですね。その「水を盗む」と言われる「時」をちょっと頂戴して自分は昼寝をしています、という歌ですね。八十代の昼寝の歌を、こんなに美しく詠んだものは空前絶後というか、失礼ながら「古い」を詠む時の、ものすごい希望になるような一首だと思っております。

岡井 お褒めいただいたので、「そうですね」と言っておけば一番いいんですけれど（笑）。八十を過ぎると体が変わるということを、この頃よく言われます。我々が習ったころの老人病学というのは六十代までなんです。七十代、八十代の人間がどうなるかということ、老人病学では教えてくれなかった。「人生わずか五十年」という常識があつての六十代だったわけですから。その後いろいろわかつてきて、全世界のお医者さんが一所懸命

に勉強して、八十代、九十代、百代と、人間の体がどうなるかがだんだんわかつてきた。そうすると、昼寝ひとつだつてそう単純なものではない。昼寝が三十分以上延びてしまうと夜眠れないから良くないと、世界中にいる睡眠関係の専門家が言っていますね。そういうものを聞いてみると、つくづく我々の習つた六十代までの老人病学が世界で解明されているなど。それも、一年ごとに学説が変わつたりする。滑稽と言えば滑稽ですけど、しかたがないというところもありますね。医学研究者たちにとつては、新しい境地に入つちやつたんだね。僕のこの歌は、ギリシヤの人生訓などばかりいろいろ書いたものなどを読んでいて、中日新聞の朝刊に「けさのことば」という連載をずっと書いていた頃です。

二〇一四年まで書いていましたが、その時に、いろいろな古い言葉を引っ張り出す。そうしたら、こういうおもしろい言葉が出てきた。ギリシヤ、ローマの人たちのものの方というのは、ちよつと永遠性があつて、今の時代に通じるものがある。「時、時間とは何か」というときに、「水を盗む」と言う。「クレプシエドラ」というギリシヤ語をわざ

わざ横につけていますけれど、この言葉の響きというものをおもしろがってほしいなという感じがありますね。

この頃、年をとつてきたせいもあるのですが、なるべく、楽しいというかおもしろいというか、うつむいて暗くならないような感じに。昼寝だつて、かなりきつい状況で昼寝をしているんだけど、これにギリシヤ語を添えてやったら、あるいは「水を盗む」という概念をくつつけてやったら、ちよつと明るいというかおもしろいというか、そういう感じに出るかな、と。気持ちそのものは沈んじゃうわけですが、なるべく明るい歌を作ろうかなと。人の言葉を横つちよに置いて、そこからちよつと言葉をもらつて。それが、僕の今のやり方としてはいいみたい。

栗木 すばらしいです。もつともつとお聞きしたいのですが、時間がきてしまいました。岡井さんの、言葉への飽くなき好奇心、それから自分を見つめる目にお医者さんとしての科学的視点があるなどということを、今のお話からうかがわせていただきました。

ありがとうございます。